

平成26年度に本会報へ1年間にわたり掲載した「禁煙推進委員会だより」について、今年度、新たに委員の先生方にご執筆いただいたものを1年間掲載させていただくことになりました。

会員の皆様の参考になれば幸いです。

〔常任理事 中村 洋〕

## 禁煙推進委員会だより

### 「喫煙と疾患に関する最近の知見」

山口大学大学院医学系研究科呼吸器・感染症内科学講座教授／  
山口県医師会禁煙推進委員会委員長 松永 和人

#### 能動喫煙と疾患について

喫煙による健康被害を来す代表的な疾患として、悪性腫瘍（肺がん、口腔咽頭がん、喉頭がん、食道がんなど）、脳血管疾患、虚血性心疾患、COPDなどが挙げられることが多いですが、最近のトピックでは新型コロナウイルス感染症の重症化にも関わることが挙げられています。武漢の医療機関からの報告では、人工呼吸器装着および死亡リスクが約3倍に増加するとされました。また、喫煙と強く関連があるCOPD、虚血性心疾患、高血圧なども重症化因子に挙げられ、喫煙の影響は極めて大きいと思われます。感染症の領域においても、今後、禁煙指導が益々重要になってくると思われます。

また、従来から言われるように、悪性腫瘍でも数多くの種類のがん死亡の相対リスク上昇が指摘されています。代表的なものでは、肺がんが男性で4.8、女性3.9、喉頭がんで男性5.5、口腔がん、中咽頭がん、下咽頭がんで男性2.7、女性2.0、食道がんで男性3.4、女性1.9、膀胱がんで男性5.4、女性1.9との報告があります（『禁煙学』（日本禁煙学会）より抜粋）。国際がん研究機関（IARC）の報告では、確実に喫煙と関連する癌腫として、口腔・鼻咽頭・副鼻腔・肺・食道・胃・膵臓・大腸・肝臓・腎臓・尿管・膀胱・子宮頸部・卵巣・骨髄性白血病が挙げられています。一見、関係が乏しそうな領域のがん発症にも影響があり、例えばHPVワクチンが再び推奨となった子宮頸がんでもヒトパピローマウイルス感染に喫煙が加わることにより、相乗的に発症リスクが高まることが報告されています。

さらに、呼吸器内科領域では喫煙との関連が深いCOPDや気管支喘息に伴う気流制限が健康寿命短縮の原因として重要であることが明らかにされてきました。特に、COPDは未だに認知度が低く、喫煙の長期予後に対する影響について広く周知する必要があります。

#### 受動喫煙と疾患について

タバコが不完全に燃焼することで生じる副流煙や喫煙者が吐き出す呼出煙には多くの有害物質が含まれますが、受動喫煙との因果関係が確実とされている疾患としては、①肺がん、②COPD、③虚血性心疾患、④脳卒中、小児では乳幼児突然死症候群、小児喘息、中耳炎、妊婦への影響としては低出生体重児、早産、子宮内発育遅延などが挙げられています。COPDでは、妊産婦の喫煙、出生後の小児喘息、肺炎の発症などによって肺の発育障害が起こり、成人になってからも呼吸機能低下が持続することが報告されるようになりました。胎児期、小児期から可能な限り受動喫煙を避ける必要性があります。多くの施設では喫煙所の設置や敷地内禁煙が行われていますが、最近は三次喫煙（残留受動喫煙、サードハンド・スモーク）といって環境、衣類などに残留した有害物質を吸い込むことの影響も指摘されるようになり、現在の分煙だけでは不十分なのかもしれません。

山口県医師会としては、日常の診察や禁煙外来などを通じて喫煙による障害を減らすべく、さらなる取り組みを推進して参りたいと思います。引き続きご理解とご協力のほどよろしく願いいたします。